

2018年9月29日30日 順天堂大学医療看護学部



日本混合研究法学会第4回年次大会 総括

大会長 尾島 俊之

実行委員長 野崎 真奈美



2018年9月29～30日に、順天堂大学医療看護学部（浦安市）において、第4回日本混合研究法学会年次大会を行いました。参加者146名とスタッフ14名の合計160名で盛況な大会を行うことができました。

今回の大会のメインテーマは「混合研究法と実践」といたしました。年次大会も回数を重ね、混合研究法について学ぶだけではなく、実践する段階に入ってきていると考えたからです。このタイトルを冠した基調講演を中村高康先生（東京大学）にいただきました。高校3年生を対象に継続的に実施されている学校パネル調査による実践的な研究に基づいて混合研究法への示唆をお話いただきました。そして、引き続きこのテーマによるオープンフォーラムが行われ、田島千裕先生による話題提供と短時間でしたが中身の濃いディスカッションが行われました。

マイクD. フェターズ先生、ジョンW. クレスウェル先生からは、分析及びデザインについての特別講演、ジョイントディスプレイに関するワークショップを行っていただきました。頭の整理になるとともに、今後の方法論の発想が広がるセッションでした。

今回の大会での特徴的な挑戦として、ラウンドテーブル形式によるセッションを導入しました。比較的少人数でテーブルを囲んで、発表に引き続きじっくりと意見交換するというものです。混合研究法学会にふさわしいディスカッションを行うことができ、今後の定番となりそうです。

大きなハプニングとしては、台風第24号に襲われたことがありました。30日の夕方から関東地方直撃の可能性があり、またJR等の交通機関からは大規模な計画運休の情報が入りました。そこで、急遽2日目のプログラムについて、時間を短縮して実施することにしました。ただ、交通機関が止まる前にということで、2日目の参加を断念された方や、終了後に帰宅できずにもう1泊した方も少なくありませんでした。一時は、会場で夜を明かさなければならないかと覚悟しましたが、けが人もなく終えることができました。

最後に、参加いただきましたみなさま、運営に関わっていただきましたみなさまに、心より感謝申し上げます。



大会終了後 メイン会場にて

文責： 尾島 俊之
浜松医科大学健康社会医学講座 教授
日本混合研究法学会 理事長

野崎 真奈美
順天堂大学医療看護学部 教授
日本混合研究法学会 理事

2018年9月29日30日 順天堂大学医療看護学部

プレカンファレンス・ワークショップ参加報告

「混合研究法におけるジョイントディスプレイの3つの用途とデータ分析のための対話的アクティビティ」

“Three Uses of Joint Display in Mixed Methods Research and an Interactive Activity for Data Analysis”

講師: ジョン W. クレスウェル
John W. Creswell
ミシガン大学 教授

講師: マイク D. フェターズ
Michael D. Fetters
ミシガン大学 教授



はじめに驚いたことは、個人的なこととなりますが、クレスウェル先生がテキサス州オースティンに在住されていると伺ったことでした。なぜなら、私もテキサスに住んでいたことがあったからです。100mgのカフェインを含有する黒い液体を胃に流し込むよりも、この驚きにより目が覚めました。

自己紹介が終わると、クレスウェル先生は、ジョイントディスプレイの使い方について説明されました。クレスウェル先生は、複雑なことを整理し、極めて明瞭にその本質を示されますが、このジョイントディスプレイについても明瞭にその使い方を示されました。ジョイント・ディスプレイは、①統合した結果を示す図表として使われる、②分析ツールとして使われる、③データ収集の計画のために使われることをご説明になりました。恥ずかしながら、私はジョイント・ディスプレイを単なる①としか理解しておらず、②や③のように混合研究法を実践するためのキモとして活用しうる、重要なものと学びました。

フェターズ先生は、ジョイントディスプレイを使用した研究(MPathic-VRプロジェクト)についてご説明になり、そのあと参加者はワークを行いました。①混合

データをつなげる、②ジョイント・ディスプレイを作る(共通概念のリストをつくり、それを論理的な順番に並べる)、③関連性のある質的テーマと量的結果でジョイント・ディスプレイを作る、の3つのワークでした。クレスウェル先生のお話で「わかった」という気持ちを揺さぶるような、「あれ？」という「ひっかかり」がこのワークにはありました。しかし、この「ひっかかり」はとても大切な経験だと思います。なぜならば、「わかった」と「わからない」の揺れ動きのなかで、らせん階段を上るように行きつ戻りつすることにより、本当の理解に至るのだと思うからです。フェターズ先生の適切なご助言により、正しいらせん階段を上り始めることができたと思います。また、グループで取り組むことにより、らせん階段をより力強く上ることができたのではないかと思います。

ワークでは、わからないことを知るためにも間違えることは重要だと思います。テキサスに住んでいる際に刑務所博物館に行くつもりが、本物の刑務所の受付に行ったことがありました。こういう間違いには、気を付けましょう。

報告者:

加藤 憲
藤田医科大学 研究支援推進センター 学術研究支援推進施設 講師

第4回日本混合研究法学会年次大会

参加報告

私の専門分野の英語教授法・第二言語習得である。教育実践や研究の複雑な場を少しでも把握するためには、混合研究法について学びたいとの思いを持っておりました。そのため昨年度日本混合研究法学会会員になり、昨年の第3回に引き続き今年度の第4回年次大会に参加し、実りのある時間を過ごすことができました。



講師に質問をする参加者

その1つの理由は、混合研究法に興味のある方々との出会いです。看護などの他分野の人々とお互いの研究分野や職場の話なども楽しく語りあうことができました。混合研究法という同じ志を持った仲間と悩みなどを聞いたり話したりすることで「悩んでいるのは私だけではない」ことを実感しました。昨年の大会でお会いした方々とも再会することもできました。ほとんどの学会は同じ専門分野の人々の集まりですので、このような貴重な経験はなかなか体験できません。複雑な事象を探究するためには、他分野の方々とともに交流することで、インスピレーションが沸き励みになると思いました。

混合研究法を基礎から応用まで多面的に学ぶ機会も有り難かったです。確かに書籍も役立ちますが、私のような混合研究法初心者にはワークショップ、講演、ラウンドテーブルを通して学んだほうが、学びが

スムーズで豊かになります。手法で特に印象に残ったのは、ジョイントディスプレイです。質と量の研究を統合するための対話的アクティビティで結果が理解しやすくなるだけでなく、分析ツールやデータ収集に活用できるのですから、ビジュアルリタラシーの時代にこれを知ることができたのは大きな収穫と言えます。具体的研究で特に参考になったのは、田島千裕先生の日本人大学生のフィリピン留学における英語習得に関する研究でした。私と同じ英語教育の分野なのですが、データ収集・処理、ジョイントディスプレイなど目から鱗でした。また、2日目のオープンフォーラムでは、田島先生の研究を例に外部資金獲得を含めた研究運営方法が具体的に示され、どのように研究をすればよいかの参考になりました。このような機会は、混合研究法に限らず量的または質的アプローチでも有効ですが、他ではなかなかないのではないのでしょうか。

最後に、知識、スキル、モチベーションを得る機会をくださった、本年次大会の主催者の方々や学会の方々に心よりお礼を申し上げたいと思います。



メイン会場の様子

報告者：

樫 まゆみ
文京学院大学 教授

2018年8月22-25日 オーストリア・ウィーン大学 MMIRA 国際大会 2018 参加報告 巻頭言



以下は、2018年8月22日～25日にウィーン大学（オーストリア）で開催された、国際混合研究法学会第3回大会（3rd MMIRA Global Conference）の大会基調講演およびワークショップのJSMMRメンバーによる報告です。40カ国から265名の参加があった今大会のテーマは、“Gaining New Ground: Depending and Expanding the Field of Mixed Methods”でした。今回、ここに収載された報告のすべてに、この大会テーマが貫かれているのをお感じいただけるのではないかと思います。



セッションの様子

ウィーン大会に参加して特に印象深かったことは、混合研究法が新たな段階に到達したということです。この変化を一言で喩えるならば、「レシピから冒険へ」のシフトということになるでしょう。この比喩は、『心理学のための質的研究法入門－創造的な探求に向けて－』を著したWillig (2001 上淵寿・大家まゆみ・小

松孝至共訳, 2003)によるもので、質的研究に出会うことにより彼女の研究法観が、「機械的なもの(適切な技法を問題に適用する方法)」から「創造的なもの(どうやったらわかるようになるのか)」の段階にシフトしたことを表現したものです。

ウィーン大会も、混合研究法のあり方が、これまでの固定的(機械的)なものから、より柔軟で流動的(創造的)なものへとシフトしたことを実感する大会であったといえるでしょう。今大会では、混合研究法を支える哲学的基盤から、デザイン、分析手法、結果の報告に至るまで、研究プロセスの様々な要素においてイノベーションが起きていることを感じさせる内容の講演や発表が印象に残りました。この新たな段階へのシフトを支えてきたのは、*Journal of Mixed Methods Research*を始めとする専門学術雑誌の登場や、2014年以来開催されている国際大会と、日本を含む世界各国で開催されてきた地域会議の成果の蓄積といえるでしょう。混合研究法について議論する場や機会がグローバルに増えることで、先人たちが作り上げた混合研究法の礎を大切にしながらも、研究者個々人の世界観や研究目的に合致した混合研究法の新しいカタチを模索する「冒険」が後押しされたのではないかと思います。

(次頁につづく)

報告者：

抱井 尚子 教授
青山学院大学国際政治経済学部 国際コミュニケーション学科
日本混合研究法学会 理事



現地の大会ポスター

(前頁からのつづき)

混合研究法が冒険の段階に入ったと言っても、**anything goes** (何でもあり)の段階に入ったということでは決してありません。むしろ冒険をするからこそ、軸となる方法論に対する深い理解や論理的一貫性が求められる段階になったと言えるのではないのでしょうか。先人が用意してくれた混合研究法の理論的・実践的知の礎を尊重しながらも、そこに留まることに満足せず、目前の課題を解決するために、柔軟かつ創造的に混合研究法の拡張を試みる態度をもつことが重要であると感じさせられた大会でした。



コンファレンスディナー

末筆ながら、この巻頭言を執筆するにあたり、ここに収載された報告一つひとつを改めて拝読させていただくことで、当時の記憶が鮮明に蘇るのを感じました。報告者の皆様には改めて感謝申し上げます。大会にご参加いただけなかった会員の皆様にも、これらの報告をお読みいただくことによって、あの時、あの場所で醸成された知的興奮の一端に触れていただけるのではないかと思います。



メンタリングセッションの様子

引用文献

Willig, C. (2001). *Introducing Qualitative Research in Psychology: Adventures in Theory and Method*. Maidenhead, UK: Open University Press. (ウィリッグ, C. 上淵寿・大家まゆみ・小松孝至, 共訳 (2003). 心理学のための質的研究法入門—創造的な探求に向けて—培風館)

報告者：

抱井 尚子 教授
青山学院大学国際政治経済学部 国際コミュニケーション学科
日本混合研究法学会 理事

MMIRA 国際大会 2018

プレナリー参加報告

“Investigating the dialogical relationship between language use and language attitudes under a mixed-methods logic”

講師: Barbara Soukup
University of Vienna 研究員



On Friday, August 24th, Dr. Barbara Soukup, a research fellow at the University of Vienna Department of English, delivered a paper at the 2018 MMIRA International Conference, which was held at the University of Vienna.

Dr. Soukup spoke to a full auditorium of conference attendees about various aspects related to a current research project, which is funded by the Austrian government, and which consists of a focused sociolinguistic study regarding how English is used within Austrian society. She specifically focused in her talk on the English language choices used on written signs in Viennese public space as well as marketing messages, and considered the meaning-making strategies of sign-readers. One point that she highlighted was that, in most cases, the signage written in English was intended for Austrians, not native English speakers. In a real sense, English was not truly being used. Rather, it was Austrian German being communicated through the medium of English, and in ways that Austrians, rather than native speakers of English, could understand.

Soukup showed many examples and engaged the audience with entertaining anecdotes, though the

notion of mixed-methods seemed to be more implied than explicitly addressed in her talk. At the end of her talk, my first impression (as an Applied Linguist who has lived in Japan for many years) was that her conclusions seemed to be basic and perhaps rather obvious to many, especially in her conclusion of how English was being contextualized within the linguistic landscape of a non-English speaking society. In hindsight, however, I believe that Soukup struck the right tone and achieved an appropriate level of depth for the Mixed Methods International Research Association, which is attended by researchers from fields ranging from medicine to business studies, and who perhaps would not be prepared for a deeper, more technical sociolinguistic discussion.

In conclusion, Dr. Barbara Soukup's paper was informative, entertaining, and an excellent example of how scholars from disparate fields can come together and enrich each other's lives through the dissemination of their work.

報告者:

Gregory Hadley
新潟大学人文社会科学系 教授

MMIRA 国際大会 2018

プレナリー参加報告

“Moving forward with Mixed Methods”

講師: Burke Johnson
University of South Alabama 教授



Dr. Burke presented on the conference theme of deepening and expanding the field of mixed methods. He focused on six issues facing MMR in this deeply personal keynote. Underlying all of the issues presented seemed to be a need for mixed methods research to become a living and reflective practice, rather than an automated or reified process. The “thoughtfulness” of MMR was strongly emphasized throughout, with his discussion providing a rich and varied account of how the field should might progress.

Beginning with the basic premise that MMR can be more heavily quantitative or qualitative—rather than being exactly equal—he re-addressed basic terms and distinctions, such as method, methodology and paradigm, as well as means of data collection. This allowed us to reconsider the underlying assumptions of both inter- and intra-method mixing. He demonstrated the need to be active in design construction, rather than simply selecting a design, illustrated with reflections on his supervision of students using mixed methods Grounded Theory design.

Given Professor Burke’s background, his raising the topic of pragmatism was no surprise. Rather

than simply using it as a panacea, however, he encouraged us to “pick our pragmatist,” again emphasizing the active choices that we make as practitioner. He took us through the approaches of Pierce, James, Dewey, and others showing us how pragmatists can differ, yet still be pragmatists.

Speaking to a common issue among social scientists, he addressed the nature of causality, referring to it a “mosaic.” Seldom in the field do we get a simple causal picture of what is happening. It is the interplay between all the possible ways of explaining causality that creates this image of a causal mosaic. No single idea can satisfy all domains of explanation, hence the need for an active construction of causality that will fit the research that one is doing. This approach helps those who need to use our research by being practical and theoretical, in that the more approaches to causation research addresses, the stronger any evidence or claims based on that research may be.

(Continue to the next page)

報告者:

Myles Grogan
関西大学外国語学部 特任外国語 講師

MMIRA 国際大会 2018

プレナリー参加報告

(Continued from the previous page)

Building on this need for being more integrative and creative, he then reviewed the benefits of dialectical pluralism for both individuals and groups. Individuals dialoguing with different methods can respect the multiple perspectives it brings, helping create better research by integrating theory and practice, and rejecting an either/or approach. Groups can help create tolerance and positive change while allowing for difference, positive conflict, and disagreement—and thus greater empathy.

He concluded by stressing the importance of multiple validities legitimization, with an emphasis on relevance. He offered a map of the development of legitimization approaches that have been modified by the MMR community as practice develops, with the addition of pragmatic legitimization and integration legitimization to the original set of legitimations to those approaches originally presented in Onwuegbuzie and Johnson (2006).

As one would expect from a long-standing practitioner who has contributed so much to the debate while cultivating a new generation of researchers, there was a lot of insight in this short hour. He presented six ideas that became hard to separate. While the content of his speech was broad, it was not prescriptive, leaving the ultimate responsibility to the audience to take up the gauntlet and carry the field further.



Burke Johnson's Plenary Talk



University of Vienna

報告者：

Myles Grogan
関西大学外国語学部 特任外国語講師

MMIRA 国際大会 2018 2018年8月22-25日 オーストリア・ウィーン

ワークショップ 参加報告

ワークショップ 1:

“An Integrated Approach to Designing a Mixed Methods Research Course: Applicable for Face-to-Face and Online Settings”



講師: Kathleen M. T. Collins
University of Arkansas 教授



講師: Cheryl Poth
University of Alberta 教授

混合研究法の教授法に関する論文・書籍は、量的研究や質的研究と比較すると圧倒的に少ない。理由として、混合研究法がここ30年ほどで急速に発展した、比較的歴史の浅い研究アプローチであることが第一に挙げられる。本アプローチに関しては、その基本的な諸概念とロジックを理解する段階にある読者がいまだに多いということである。しかし、北米を中心に混合研究法がいよいよ次の段階に入つつある。2000年に入る頃にはアメリカ国立衛生研究所(NIH)が混合研究法の普及をヘルスリサーチの領域において推進し始めた。そしてポスト実証主義が支配的な心理学においても、アメリカ心理学会(APA)が新版の執筆マニュアルに質的研究および混合研究法の論文執筆基準を含めることになった(Levitt et al. 2018)。

ジー氏(Onwuegbuzie, A.)とこれまで数々の共著論文を出版して来た米国・アーカンソー大学のキャシー・コリンズ氏(Collins, K.)と、2017年から今大会までMMIRAの会長を務めたカナダ・アルバータ大学のシェリル・ポス氏(Poth, C.)によるものであった。両氏ともに*Journal of Mixed Methods Research*の編集委員会メンバーである。2人の講師がそれぞれ実際にどのような流れに沿って混合研究法を教えているのかが、シラバスや課題といった具体的な資料も交えて紹介された。そして、概念化、計画、実行、指導の段階からなる「MMRインストラクションの4段階モデル」が示され、それぞれの段階で受講生の学びを支援するアクティビティが紹介された。15名ほどの参加者の約3分の2が実際に混合研究法のクラスを担当しているということもあり、講師と参加者の間で意見交換も活発に行われた。参加者からは、量的・

今回のワークショップは、アンソニー・オンウェノブ

(次頁につづく)

報告者:

抱井 尚子 教授
青山学院大学国際政治経済学部 国際コミュニケーション学科
日本混合研究法学会 理事

MMIRA 国際大会 2018 2018年8月22-25日 オーストリア・ウィーン

ワークショップ 参加報告

ワークショップ 1:

“An Integrated Approach to Designing a Mixed Methods Research Course: Applicable for Face-to-Face and Online Settings”



講師: Kathleen M. T. Collins
University of Arkansas 教授



講師: Cheryl Poth
University of Alberta 教授

(前頁からのつづき)

質的研究の単位を既に取得していることを混合研究法のクラスの履修要件とするべきか、限られた時間の中で効果的に混合研究法を学んでもらうためにはどのような工夫が必要か、対面とオンラインの授業ではそれぞれどのような点に気をつける必要があるか、といった質問が出た。

本ワークショップに参加するにあたり、私には気になっていたことがあった。それは、混合研究法とは何であり、混合型研究は具体的にどのように進めて行くべきかについて統一的なガイダンスを受講者に提供することが、多様な認識論的スタンスを混合研究法が包含する現在においては非常に難しいのではないかという懸念であった。この懸念を講師にぶつけたところ、私にとって非常に納得の行く答えが返ってきた。それは、「引用文献を味方につける」であっ

た。これはつまり、自身のアプローチの合理性に根拠を与えてくれる文献を引用することができさえすれば、自分のやり方で混合研究法を定義づけ、自分のやり方で混合型研究を展開することができるということである。混合研究法を教える上でもっとも重要なことは、「先人の知恵を借りて理論武装することで、あなた自身の混合型研究を生み出して行けば良い」というメッセージを受講者に伝えること、これが本ワークショップから導き出した私なりの結論である。

引用文献

Levitt, H. M., Bamberg, M., Creswell, J. W., Frost, D. M., Josselson, R., & Suárez-Orozco, C. (2018). Journal article reporting standards for qualitative primary, qualitative meta-analytic, and mixed methods research in psychology: The APA Publications and Communications Board task force report. *American Psychologist*, 73(1), 26-46.

報告者:

抱井 尚子 教授
青山学院大学国際政治経済学部 国際コミュニケーション学科 理事
日本混合研究法学会

MMIRA 国際大会 2018 2018年8月22-25日 オーストリア・ウィーン

ワークショップ 参加報告

ワークショップ 2:

「混合研究法への道案内:混合研究法を各自の研究実践に結びつけるために」

“Navigating Mixed Methods Research: Connecting the Field of Mixed

Methods to your Research Practice”



講師: Vicki L. Plano Clark
University of Cincinnati
准教授



講師: Peggy Shannon Baker
Georgia Southern University
助教授

プラノクラーク先生(シンシナティ大学)は混合研究法に関する多くの著書や論文を刊行されており、筆者はこれらを通してよく存じ上げていたが直接の接点はこれまでなかった。

筆者のここ最近の関心は、縦断的混合研究法(Longitudinal Mixed Methods)である。プラノクラーク先生は、この方法に関するレビュー論文を刊行されており、筆者は7月にその論文を偶然目にする事ができた。論文の中では、筆者らの論文も引用され、縦断的混合研究法について論説されていることを目の当たりにし、大変な驚きとともに、他国の研究者から着目される研究を筆者らが行っていたことに喜びを感じた経験があった。そのため、今回ウィーンで開催されたワークショップでは直接講義を受けてみたいと思い、迷わず彼女のワークショップへの参加を希望した。

このワークショップはプラノクラーク先生のお弟子さんにあたるシャノンベイカー氏(ジョージア南部大学)との息の合ったコンビにより進められ、各国から

約25名が参加した。

ワークショップは和やかに、参加者の自己紹介から始まり、各自の専門領域などの一言紹介があった。次いで、配布されたピンク色のカード、白紙に円が描かれたシートに参加者自身の混合研究法の取り組みを明確化していくアクティビティと講義が交互に進められた。

ピンク色のカードには、混合研究法で明らかにしたいと考えているリサーチクエスチョンを一文で記した。これは続く作業である、白紙に描かれている円に具体的な混合研究法による研究方法、デザイン、定義、データの統合などについて明確化していく上でのコアとなるものであった。

講義では、多くの書籍の紹介とともに、概念枠組みを立てることが研究のトピックを統合化したり説明する上で有用であることが強調された。またプラノクラーク先生とアイバンコーバ先生により開発された新しい枠組みについての解説があり、配布された白
(次頁につづく)

報告者:

亀井 智子
聖路加国際大学大学院看護学研究科 教授
日本混合研究法学会 副理事長

MMIRA 国際大会 2018 2018年8月22-25日 オーストリア・ウィーン

ワークショップ 参加報告

ワークショップ 2:

「混合研究法への道案内:混合研究法を各自の研究実践に結びつけるために」

“Navigating Mixed Methods Research: Connecting the Field of Mixed

Methods to your Research Practice”

講師: Vicki L. Plano Clark

University of Cincinnati

准教授

講師: Peggy Shannon Baker

Georgia Southern University

助教授



(前頁からのつづき)

紙のシートには、この枠組みで各自の研究を表現するように、進められた。この枠組みは、すでに書籍の中でも紹介されているもので、中心部分には「混合研究法のプロセス」、その周囲に「混合研究法の構成要素」、もうひとつ外周には「混合研究法の文脈」を各自が各々の研究に合わせて考えるためのものである。

「混合研究法のプロセス」のセクションは、リサーチクエスション→方法→推論の順で3点を考え、より各自の研究を具体化するためのものである。ここでは研究者が質・量どちらの立ち位置をとるのか、データ収集のタイミングと統合、質・量の優先付けなどを考えるための位置づけとなっている。

次いで「混合研究法の構成要素」では、混合研究法のデザイン、定義、関係性、混合研究法の質、混合研究法とその他のアプローチについてじっくりと考えるためのものである。多様な見方、研究を進める上で決めた事柄に各研究者が参与すること、社会

文化的文脈によって研究が形作られていくことについて解説があった。

「混合研究法の文脈」では個人的文脈、対外的文脈、社会的文脈の3つの階層で検討し、社会の中での研究の位置づけを検討するとともに、研究者がどのように混合研究法のトレーニングを受けるか、他者からはこの研究はどのように映るのか、使用する言語、研究資金など、多様な文脈から各自の研究を包含的に眺めることについて触れられた。

最後の数十分は小グループ討議を行い、3〜4名のグループに分かれて、各自が描いたシートを基に各々が計画している混合研究法による研究を紹介した。筆者の研究はさておき、他国の若い研究者達の活気と強い関心、混合研究法の学習意欲を感じることができ、“keep in touch with you”と言い合いながらグループ討議を終えることができた。両氏のスマートな進行によるとても意義のあるワークショップであった。

報告者:

亀井 智子
聖路加国際大学大学院看護学研究科 教授
日本混合研究法学会 副理事長

MMIRA 国際大会 2018 2018年8月22-25日 オーストリア・ウィーン

ワークショップ 参加報告

ワークショップ 3:

“Introduction to (Mixed Method) Social Network Analysis”



講師: Dominik E. Froehlich

University of Vienna

講師: Jasperina Brouwer

University of Groningen



社会ネットワーク分析は、ある社会集団におけるアクターの影響力や派閥といった量・質の両面に関わる特性を、各アクターの属性ではなく、集団の関係構造から捉えようとする手法である。関係構造をグラフとして表現することでさまざまな特性をグラフ理論の手法で算出することができる。近年多くの分析ソフトが開発され、大規模なネットワークの扱いも容易になったことから、社会ネットワーク分析は、量的研究の一種と捉えられる場合が多い。そして、量的研究としての社会ネットワーク分析と、インタビュー調査などの質的研究を組み合わせた混合研究法の実践例も出てきている。

その一方で、社会ネットワーク分析が本来備えている、量と質の相互補完的な性質に着目し、プラグマティズムの立場から、いわばハイブリッドな混合研究法として見直す動きが出てきている。このような考え方は、「混合法社会ネットワーク分析 (Mixed Methods Social Network Analysis: MMSNA)」と呼ばれる。本ワークショップは、このような新しい考え方を紹介することを目的としたものであった。そしてワークショップの冒頭では、社会ネットワーク分析が質・量的視点を相互に補完するアプローチであるという解釈が紹介された。

ワークショップの中では、個人、組織、企業の関係性といった社会ネットワークの具体例や、社会ネットワーク分析の基礎概念、そして各種分析ツールが紹介された。そしてワークショップの説明の合間に、どのような社会集団のどのような現象を理解したいのか、どのようなデータを元に社会ネットワークを作成できるか、社会的ネットワーク分析を用いて量的・質的な視点からどのような知見を得る見込みがあるのか、といった質問を参加者に投げかけ、参加者がペアになって各自の興味やアプローチの仕方について議論をするというスタイルで進められた。

本ワークショップ参加者は30名程度であった。参加者の専門分野は、社会学、心理学、看護学、教育学など多岐に渡り、社会ネットワーク分析の手法を学じたいという参加者もいた。そのためワークショップでは、社会ネットワーク分析の基礎理論やツールの使い方の説明に多くの時間が割かれた。結果として、社会ネットワーク分析と混合研究法の標準デザインとの関係や、質・量の統合の視点について説明する時間があまりなかったという印象はある。ただ、質的・量的な視点を融合したハイブリッドな混合研究法としての社会ネットワーク分析の可能性を実感できたワークショップであった。

報告者:

稲葉 光行
立命館大学政策科学部 教授
日本混合研究法学会 理事

MMIRA 国際大会 2018 2018年8月22-25日 オーストリア・ウィーン

ワークショップ 参加報告

ワークショップ 4:

“Meeting the Challenges of ‘Voice’ in Writing up the Results of Mixed Methods Social Inquiry”

講師: Jennifer C. Greene

University of Illinois at Urbana-Champaign 教授



Jennifer C. Greene教授(米国イリノイ大学アーバナシャペーン校)は、Mixed Methods Researchの礎を築いた研究者の一人として知られ、MMRに対して弁証法的スタンス(dialectic stance)をとる(Greene, 2007)。本ワークショップでは、混合型研究によって社会現象を探究した結果を詳述する際に声(voice)をどのように捉えるかについて、参加者と議論が繰り広げられた。この参加報告では、質的研究における声(voice)をめぐる背景を確認し、Greene氏の発した問いかけの一端を紹介する。そして、MMRにおける方法論的議論に関する雑感を述べたい。

声(voice)は質的研究の用語として、社会科学における文学的転回(literary turn in social science)に由来するものとフェミニズム哲学に由来するものがあり、いずれにおいても語り手の存在が重要な意味を持つことが知られている。Greene氏のMixed Methodsの定義を踏まえるならば、本ワークショップのテーマに込められた“voice”には、より文学的転

回のニュアンスが込められていると考えられる。つまり、声(voice)とは、社会学や人類学のテキストが研究者によってつくられたものであるという想定のもと、一人称の記号か三人称の記号かを確定させる役割をもつ概念である(Schwandt, 2007)。

ワークショップではより端的に、「声(voice)とは、研究者の立ち位置であり、研究者の持つ前提と価値観に裏打ちされたものである」との説明がなされていた。さらに、関連概念として、表象/再現(representation/ re-presentation)については「研究者の問いと結果を表象/再現するために、どのように『声』を活用するか」と説明していた。ワークショップでは、Greene氏より「どの『声』でもって研究や評価を詳述し、どのような価値や立場が『声』に随伴し、どのような論理的根拠をもつか?」、「『声』によって研究や評価がどのように『達成』され、その裏にはどのような成功や制約があるか?」といった論点が

(次頁につづく)

報告者:

八田 太一
京都大学IPS細胞研究所上廣倫理研究部門 特定助教
日本混合研究法学会 理事

MMIRA 国際大会 2018 2018年8月22-25日 オーストリア・ウィーン

ワークショップ 参加報告

ワークショップ 4:

“Meeting the Challenges of ‘Voice’ in Writing up the Results of Mixed Methods Social Inquiry”

講師: Jennifer C. Greene

University of Illinois at Urbana-Champaign 教授



(前頁からのつづき)

提示された。そして、『『その他の表象』について着想が得られるのであれば、将来的に活用してみたいかがでしょうか?』、『今後の研究でどのようにご自身の『書き方』を変容させますか?』といったように、参加者に自身の将来像を考えさせる問いかけもなされた。このようにワークショップを通じて、社会現象や対象と研究者との関係、あるいは、結果として得られた事実と研究者との関係について参加者どうしでディスカッションが行われた。

2015年に本学会が設立されて以来、我々は質的研究と量的研究との統合を理解するために、研究手続きについて中心的に議論してきた。いわば「混合型研究の手続きに焦点を当てた」方法論的議論に取りかかってきたと言える。一方、今回、Greene氏より提示されたような問いを議論することは、「経験的研究の記述に焦点を当てた」方法論的議論であり「認識論に踏み込んだ」方法論的議論でもあると

言えるだろう。数十年かけてMMRの礎を築いたGreene氏の「声」にはいくつもの伏流があり、その一つ一つが方法論的議論に繋がるように感じられた。私たちの行っている混合型研究の中にも、個別的な方法論的論点がいくつも潜んでいる。今後も、それに気づき言語化し議論できる場を大切にしたい。

参考文献

- Greene, J., C. (2007). *Mixed Methods in Social Inquiry*. San Francisco, CA: Jossey-Bass.
Schwandt, T. A. (2007) *The SAGE Dictionary of Qualitative Inquiry (3rd.)*. Thousand Oaks, CA: SAGE. 伊藤勇・徳川直人・内田健(監訳)(2009) 質的研究用語事典. 北大路書房.

報告者:

八田 太一
京都大学IPS細胞研究所上廣倫理研究部門 特定助教
日本混合研究法学会 理事

MMIRA 国際大会 2018 2018年8月22-25日 オーストリア・ウィーン

ワークショップ 参加報告

ワークショップ 5:

“Using Mixed Methods with Community-based Participatory Action Research to Facilitate a Meaningful Change”

講師: Nataliya Ivankova

講師: Ivan Herbey

University of Alabama at Birmingham

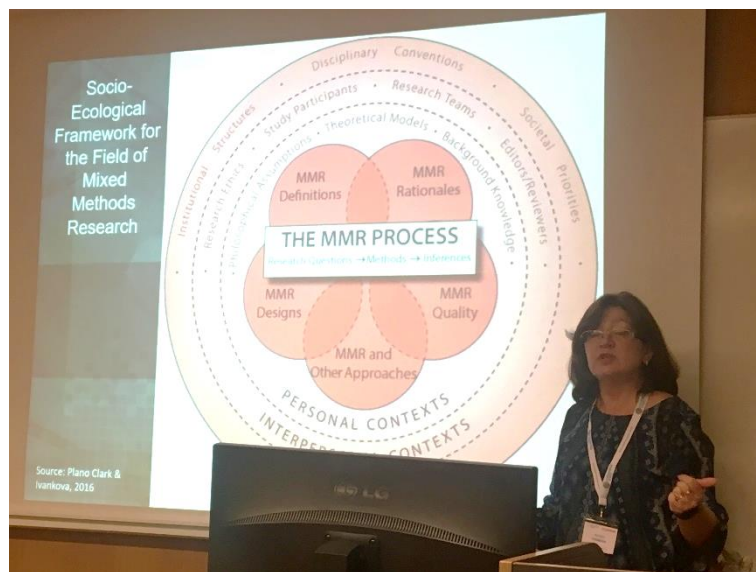
University of Alabama at Birmingham

教授

学会の最終日、Ivankova先生とHerbey先生によるCommunity-Based Participatory Action Research (CBPR)のワークショップに参加しました。前半では先生方が活躍していらっしゃるヘルス・看護分野の現場での実践状況などを交えながらCBPRのコンセプトをご説明くださり、後半にはワークシートを使って参加者それぞれが自分の研究テーマを混合研究法を用いたアクションリサーチとして書き換えてみる、という内容でした。

特に印象的だったのは、CBPRにおける研究者の立場が従来のそれとは一線を画しているということです。取り組みの主体は何らかの課題を持つコミュニティのメンバー（研究参加者）であり、研究者は彼らがその課題を解決・改善していく過程に共働的に関わり、時に助けたり教育したりするという存在となります。研究の目的は常に現状を改善することにあるので、現実社会のダイナミックな仕事の流れの中に身

を置きながら研究活動のサイクルを機能させていくことが、とてもチャレンジングです。Ivankova先生は、これは研究のための研究ではないのだと言い、”You don’t stop, keep going, keep moving!”と皆を元気づけてくれました。



ワークショップの様子

(次頁につづく)

報告者: 阿部 路子
Cross-Cultural Labo

井上 真智子
浜松医科大学地域家庭医療学講座 教授
日本混合研究法学会 理事

MMIRA 国際大会 2018 2018年8月22-25日 オーストリア・ウィーン

ワークショップ 参加報告

ワークショップ 5:

“Using Mixed Methods with Community-based Participatory Action Research to Facilitate a Meaningful Change”

講師: Nataliya Ivankova

講師: Ivan Herbey

University of Alabama at Birmingham

University of Alabama at Birmingham

教授



ワークショップ講師らと共に

(前頁からのつづき)

CBPRに混合研究法を用いることの効果については、やはり現場の課題は質・量の両面から総合的に分析して行く必要があることに加え、コミュニティ内のコンセンサス作りの難しさへの作戦としても効果的とのことでした。現場には多様な分野の人々がいるので(例えば医師、看護師、PT、患者の間に量的な

思考と質的な思考のどちらに比重があるかが習慣的に異なることは容易に想像ができます)、質と量のデータを両方見せることで両極にいる人たちの意見を尊重しながら納得を形成して行くことができるのだそうです。研究参加者のインクルージョンを促す手段としての混合研究法というのは、CBPRならではの考え方のように思いました。

ワークショップの締めくくりは、Ivankova先生のご著書 “*Mixed Methods Applications in Action Research : From Methods to Community Action*”を抽選で1名様プレゼント! というお楽しみが用意されていました。こういった工夫で場を盛り上げながら、元気な声かけで皆を励ます先生のお人柄にCBPRへの取り組み姿勢が体現されていると感じます。学会参加の醍醐味は、著名な研究者の理論を聞くだけでなく、それを生み出してきたパーソナリティを身近に感じ取れることにもあるのではないのでしょうか。

報告者: 阿部 路子
Cross-Cultural Labo

井上 真智子
浜松医科大学地域家庭医療学講座 教授
日本混合研究法学会 理事

MMIRA 国際大会 2018 2018年8月22-25日 オーストリア・ウィーン

ワークショップ 参加報告

ワークショップ 6:

“Fully Integrated Mixed Method Research Approaches”

講師: Elizabeth Creamer

Virginia Polytechnic Institute and State University



本ワークショップは、バージニア工科大学名誉教授で、大会当時にMMIRA次期会長のエリザベス・クリーマー氏によって実施され、氏の近著 “*An Introduction to Fully Integrated Mixed Methods Research*” に依拠したものであった。講師が参加者からの質問やコメントを随時受け付ける形式をとりつつ、研究の全段階で量的・質的アプローチを統合する方法を概観した。

ワークショップには世界各地から研究者や博士号取得候補者ら16名が参加し、専門分野は音楽教育から看護学まで多岐にわたった。講師は可能な限りそれぞれの分野に関連付けながら説明して下さった。

ワークショップでは、まず講師が研究者としてのご自身の歩みを紹介された。量的アプローチ・オンラインの環境から質的アプローチへ、そして混合研究法に至ったという。とりわけ強調しておられたのが混合研究法の目的であり、それは複数のデータセットを統合して、当該分野における多面的・立体的な見方をあらたに示すことであった。そのためには常に心を開いて好奇心を抱くことが重要であり、分析結果が矛盾して見えるときこそが、複雑な社会現象に対する理解を深めるチャンスであると語られた。さらにアーチをたとえに用い、混合研究法は双方のアプローチを完全に統合するかなめ石とならねばならないと主張された。

実践面においては統合の機会と方法が示された。まずは、研究デザインの段階から統合が求められる。具体的には、メソドロジーの選択、リサーチ・クエスションの設定等においてである。つぎに、データ収集時における統合である。ワークショップでは、量的・質的データを同時に収集するCritical Incident Technique (CIT) 等が紹介された。つづくデータ分析では、データの ‘quantifizing’ ・ ‘qualitizing’ による統合が行われる。質的データをコード化して解釈する方法としてはIntensity Scale Coding (ISC)やGrounded Theory (GT) が、そして統合したデータをビジュアル化する方法としては様々なJoint Displayが提示された。このような分析を経て、最終的な統合が結論を導く段階で行われるのである。

3時間という短い時間の中で、講師と参加者、および参加者同士での質疑応答や意見交換が活発に行われた。そのため、後半に予定されていたアクティビティーは割愛されたが、前掲の著書を読んで本ワークショップで得た知見を一層深めるよう励ましをいただき、ワークショップは終了となった。

参考文献

Creamer, E.G. (2017) *An Introduction to Fully Integrated Mixed Methods Research*. Thousand Oaks, CA: Sage.

報告者:

ハドリー 浩美
新潟大学教育・学生支援機構 グローバル教育センター 准教授

MMIRA 国際大会 2018 2018年8月22-25日 オーストリア・ウィーン

ワークショップ 参加報告

ワークショップ 7:

“Applying Dialectical Pluralism in Mixed Methods Research”

講師: Burke Johnson

University of South Alabama 教授

講師: Ed McLain

University of Alaska, Anchorage 准教授

講師: Susan Tucker

Evaluation & Development Associates
LLC

講師: Ray Ivatt

Evaluation & Development Associates
LLC

講師: Anthony J. Onwuegbuzie

Sam Houston State University 教授

2018年8月にオーストリア・ウィーン大学で開催されたMMIRAの第3回大会でJohnson先生らによるdialectical pluralism (以下DP)のワークショップに参加してきたので以下に当日の様子等を記せればと思う。

当日は私を含め5人の参加者だったのに対し講師の先生方も5人で、ディスカッションの際には先生方が必ず2人以上はペアやグループ内にいらっしゃるといふにかく濃密な3時間であった。参加者はある程度DPやそれに関連する研究に詳しい方から私のような初学者まで様々であった。本ワークショップの流れとしては、先ず2グループに分かれワークショップを通しての目標を決めた。私とペアになったアメリカからの方もDPについては初学者だったので、pragmatismとの違いを理解することを最初の目標にした。その後、Tucker先生により参加者の疑問等に答えていく形でDPの概説がメインで行われたが、途中何度も参加者の方からの質問やそれに応じるJohnson先生やOnwuegbuzie先生方の具体的な補足等もあり、終始参加者と講師の先生方によるインタラクティブなやり

取りでワークショップは進んでいった。

後半は、先生方同士でも議論が次第に白熱し、当時は眼前で繰り広げられる迫力のやり取りにただただ圧倒されていたばかりであったが、今思い返してみると、正にその対話によるプロセスこそDPの神髄であったのだと思う。決して一筋縄には理解しやすいとは言えないDPであるが、Johnson先生が特に強調されていたのがpragmatismは一種の妥協であるが、DPはプロセスとしての理論であるということであった。

(次頁につづく)



ワークショップ講師ら

報告者:

守屋 亮
早稲田大学大学院教育学研究科 博士後期課程
日本学術振興会 特別研究員DC

MMIRA 国際大会 2018 2018年8月22-25日 オーストリア・ウィーン

ワークショップ 参加報告

ワークショップ 7:

“Applying Dialectical Pluralism in Mixed Methods Research”

講師: Burke Johnson

University of South Alabama 教授

講師: Ed McLain

Dean of the College of Education 准教授

講師: Susan Tucker

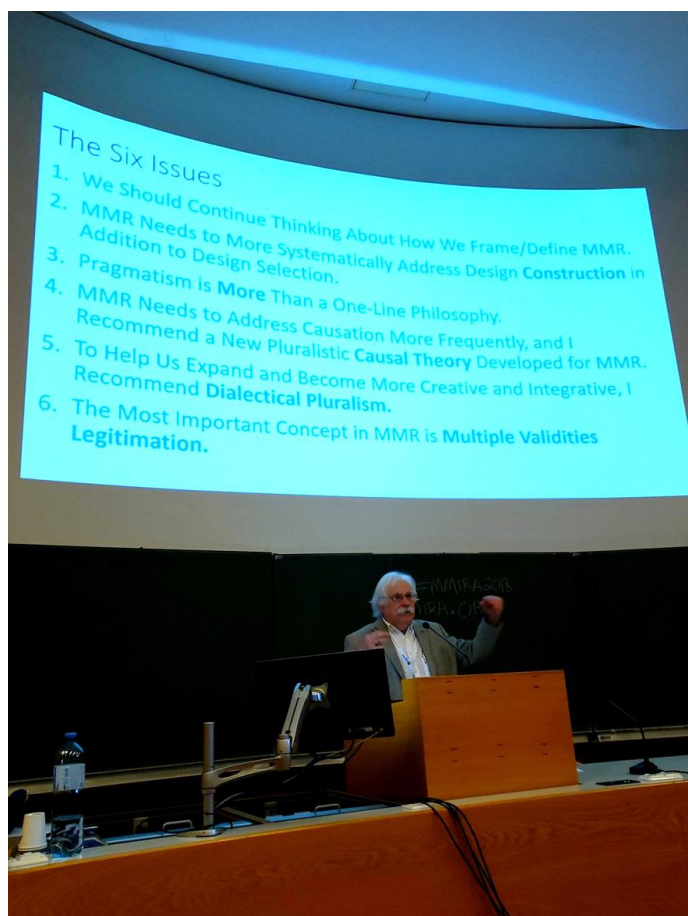
Evaluation & Development Associates
LLC

講師: Ray Ivatt

Evaluation & Development Associates
LLC

講師: Anthony J. Onwuegbuzie

Sam Houston State University 教授



ワークショップの様子

(前頁からのつづき)

つまり、混合研究法のような異なるパラダイムを1つの研究に落とし込む際、弁証法的にどのように他者や異質なもの同士を認め合い、win-winな価値を創造していくかというそのプロセス自体に重きが置かれているとのことである。

私は英語教育が専門であり、近年英語教育も混合研究法を積極的に取り入れる研究が増え、それに際し認識論・存在論といった哲学的議論が増えているのは喜ばしいことではあるが、何を良しとするかという価値論にまで踏み込んでいる研究はあまり見かけない。しかし実際、英語教育も学際的な性質がある以上、方法論・認識論・存在論といった従来の議論のみならず、価値論についても議論されていく必要があるのではないかと痛感した。私自身もまだDPを理解できたとは到底言えないが、混合研究法のコミュニティのみならず、様々な分野でもDPが秘めたる可能性や重要性が今後広がることを願うばかりである。

報告者:

守屋 亮
早稲田大学大学院教育学研究科 博士後期課程
日本学術振興会 特別研究員DC

MMIRA 国際大会 2018 2018年8月22-25日 オーストリア・ウィーン

ワークショップ 参加報告

ワークショップ 8:

“Joint Displays in MAXQDA”

講師: Udo Kuckartz 教授

Philipps University Marburg



Joint displays show quantitative, qualitative, and integrated data from a research project, allowing readers of research to view the way these interact in a research project. They were very much in evidence during the three days of the MMIRA conference in Vienna. As a consequence, the need for tools to help build on this innovation in the MMR community was also clear. Tools for creating such displays are now being incorporated natively into MAXQDA, a software package long used by many qualitative researchers. Udo Kuckartz, a key figure both at MAXQDA and in the development of joint displays, was on hand to take people through how to create these displays and demonstrate techniques to present data in visual formats.

The level of experience in the room was varied, with some “power users” in the audience. For the workshop, Dr. Kuckartz provided us with a data set from an online open-ended survey on people’s reactions to the financial crisis. The short survey contained data over 600 respondents, each becoming a “document” in the system. The data was used in both halves of the workshop. In the first half, following a (quick!) review of some of the basics of MAXQDA, we explored documents variables, which

is the key feature that allows us to look at quantitative data in MAXQDA. This was followed in the second half by a discussion of integration and the different options in the software for creating joint displays.

The first half opened with a review of some of the basic tasks. In particular, he showed several ways to do the same task, allowing us all a chance to review our work process. The topic then shifted to document variables. When importing documents into MAXQDA, features such as names of respondents, age, gender, and so on can be stored as a variable for each document. This metadata can be useful in the analysis process. At a simple level, separate data displays could be produced for male and female participants in a project, or by different employment status. The details recorded in the variables can be changed and added to according to a researcher’s needs. For example, a code used by a researcher may be changed into a variable. When such data are carefully recorded, they form the quantitative part of the joint data display.

(Continue to the next page)

報告者:

Myles Grogan
関西大学外国語学部 特任外国語講師

MMIRA 国際大会 2018 2018年8月22-25日 オーストリア・ウィーン

ワークショップ 参加報告

ワークショップ 8:

“Joint Displays in MAXQDA”

講師: Udo Kuckartz 教授

Philipps University Marburg



(Continued from the previous page)

The first session concluded with a series of tasks in a worksheet, allowing us to apply what we had just been shown. Working alone at first, and then collaborating, participants could find the aspects of the morning's work they understood and the areas that needed more attention.

The second half of the workshop looked at the different kinds of joint-displays offered in the software, as well as a more general view of the concepts of joint displays. Dr. Kuckartz outlined 10 methods of creating joint displays, dependent on where the integration of the qualitative and quantitative data occurs. Each of these results in a different kind of display. The choice of display is available from the “Mixed Methods” tab in the software. There followed a brief “guided tour” of these, with an emphasis on the “crosstab” function, using the data provided. The numeric data can be linked to extracts of interviews, summaries of interviews, or sections of data that have been “paraphrased” for the research project. The session concluded with a brief overview of the mapping

function in MAXQDA. This function allows codes, documents, and other data to be used to create a visual overview or model of the data.

During the previous three days of the conference, I had heard many people discussing the different techniques for presenting data visually. Much of the discussion involved ways of using presentation software as a kind of canvas to make images. The availability of a number of recognizable formats easily available will certainly reduce a lot of the legwork in producing data displays. Qualitative data analysis, however, always requires the input of the researcher, and can never be fully automated. The main contribution of this software will be to ease the creation of data displays, but it will not absolve a researcher's duty to think about how best to present a combination of data types in a meaningful way.

報告者:

Myles Grogan
関西大学外国語学部 特任外国語講師

MMIRA 国際大会 2018 2018年8月22-25日 オーストリア・ウィーン

ワークショップ 参加報告

ワークショップ 9:

“Publishing your paper: Meet the Editor of the *Journal of Mixed Methods Research*”

講師: Mike Fetters

University of Michigan 教授



学生であれ研究者であれ、論文を書くという営みは決して平坦なものではない。況してや、それが執筆経験の浅い学生となったら尚更であろう。私自身も当時(現在も)論文を執筆中ということもあり、藁にも縋るような思いで本ワークショップに参加した。その報告を以下に記そうと思う。

当日は10名ほどの参加者が円形に座る形で進行的した。先ずはお互いに自己紹介と参加理由を述べ、その後Fetters先生による*Journal of Mixed Methods Research* (以下JMMR)の簡単な紹介に入った。序盤でFetters先生が強調されていたのが、JMMRは様々な学問分野を対象にする学際的な国際誌であるため、方法論全般や認識論等を含む哲学的議論に特化したジャーナルとのことである。しかし、実際に送られてくる論文は多くが実証的な研究であり、JMMRに限らずどのジャーナルでもそれぞれが対象とする研究の説明を読んでほしいとのことだった。殊JMMRに限っては、混合研究法の地位を確立するために現在のような方法論等に重きを置いた形になったようである。(次頁につづく)



ワークショップの様子

報告者:

守屋 亮
早稲田大学大学院教育学研究科 博士後期課程
日本学術振興会特別研究員DC

MMIRA 国際大会 2018 2018年8月22-25日 オーストリア・ウィーン

ワークショップ 参加報告

ワークショップ 9:

“Publishing your paper: Meet the Editor of the *Journal of Mixed Methods Research*”

講師: Mike Fetters

University of Michigan 教授



(前頁からのつづき)

序盤はJMMRという大枠に関しての話だったのに対し、中盤は実際に論文を書く際の具体的なアドバイスを紹介してくださった。読者を意識するといった基礎的なことから論文全体の構成まで、改めて重要性を実感させられるものばかりであったが、特筆すべきはFetters先生が繰り返し述べられていたFigure firstという考えであった。というのも、混合研究法という性質上、どうしても本文が長く複雑になってしまいがちであるが、その際に図表を効果的に使いなさいとのことであった。具体的には、ジョイントディスプレイのみならず、本文全体の構成や査読者へのカバーレターにも図表を用いることにより、査読者にも解りやすく全体の論旨を明快にすることができるということであった。確かに、仮にJMMRで興味ある論文があってもそれがあまり詳しくない学問分野であった場合、研究結果ばかりが強調されていたり、その分野に特有の「流れ」のようなものがあつては、読者としては負担を強いられる。そういった意味でJMMR

の特定の内容に特化した性質やFigure firstという考えは然るべき工夫であろう。

終盤は各自がJMMRに出すとしたらどのような論文が書けるか考えるワークの時間に充てられた。当時、レビュー論文の執筆を漠然と考えていた身としては方法論という新たな観点を与えられ、水を得た魚の如く取り組めた。今直ぐにとはいかないが、いつかJMMRや他のジャーナルでも今回の学びが実践できる機会があればと思う。

報告者:

守屋 亮
早稲田大学大学院教育学研究科 博士後期課程
日本学術振興会 特別研究員DC

大会演題募集

2019 MMIRAアジア地域会議/ 日本混合研究法学会第5回年次大会(2019年9月14-16日) in 浜松の演題を募集しています。締切は、2019年4月30日(火)日本時間 23時59分。詳細は下記サイトをご覧ください。

<http://www.jsmmr.org/conference/jsmmr2019/jpn>

大会運営委員募集

9月の2019 MMIRAアジア地域会議/日本混合研究法学会第5回年次大会運営委員を募集しています。当日のお手伝いが可能という方、あるいは準備期間から携わってくださる方も募集します。お申し出は下記までお願い致します。
日本混合研究法学会 事務局
jsmmr.adm@gmail.com

編集後記

ニュースレター第7号には、2018年8月に開催されたMMIRAウィーン大会の参加報告を多数掲載しました。混合研究法のトップレベルの研究者らがウィーンで伝授した最先端の知識の一端を、報告者の皆さまに共有して頂きました。また、2018年9月に開催された第4回日本混合研究法学会年次大会の参加報告を通して昨年の大会を振り返ることで、今年9月開催の国際大会への期待感も膨らみます。

ここに、ご寄稿下さった皆さまに改めまして心より感謝申し上げます。

次号のニュースレター第8号は、3か月後に発行予定です。ご寄稿頂ける会員の方は、是非事務局メールアドレスまでご連絡くださいますようお願い申し上げます。記事は随時受け付けております。ご協力のほど、何卒宜しくお願い致します。

ニュースレター記事宛先(事務局):
jsmmr.adm@gmail.com

日本混合研究法学会

ニュースレター第7号

【発行日】2019年3月22日

【発行者】日本混合研究法学会

【理事長】尾島俊之・浜松医科大学

【副理事長】亀井智子・聖路加国際大学

【理事】

稲葉光行・立命館大学
井上真智子・浜松医科大学
抱井尚子・青山学院大学
河村洋子・静岡文化大学
田島千裕・学習院女子大学
成田慶一・京都大学
野崎真奈美・順天堂大学
八田太一・京都大学
福田美和子・東京慈恵会医科大学

【事務局】

福田美和子・東京慈恵会医科大学

【ニュースレター編集委員長】

田島千裕・学習院女子大学

【ニュースレター編集委員】

大河原知嘉子・東京医科歯科大学